

機関番号：13901

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2008～2010

課題番号：20680037

研究課題名(和文) 放射性炭素年代測定を利用した古筆切の史料的価値の判定

研究課題名(英文) Radiocarbon dating of kohitsugire calligraphies and the discovery of their academic value

研究代表者：

小田 寛貴 (ODA HIROTAKA)

名古屋大学・年代測定総合研究センター・助教

研究者番号：30293690

研究成果の概要(和文)：

平安・鎌倉期の古写本は完本としてはほとんど現存しないが、掛軸などに利用されたため断簡としては大量に伝来している。これが古筆切である。しかし、後世に制作された偽物・写しも多く混在するため、その高い史料的価値も潜在的なものでしかない。本研究では、こうした古筆切に放射性炭素年代測定法を適用し、史料的な価値を判定するとともに、平安・鎌倉期古写本の少なさをゆえに従来は困難であった研究を行ったものである。

研究成果の概要(英文)：

Although old manuscripts written before *Kamakura* period hardly remain as complete books, there are many pages and fragments of the old manuscripts. They are called kohitsugire. However, many copies and counterfeits written several centuries later are in circulation. In this study, radiocarbon dating of kohitsugire displayed their academic value and provided new information for the historical, literary, and linguistical studies.

交付決定額致します

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
2009年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2010年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
総計	13,300,000	3,990,000	17,290,000

研究分野：文化財科学

科研費の分科・細目：文化財科学・文化財科学

キーワード：放射性炭素・古筆切・年代測定

1. 研究開始当初の背景

^{14}C 年代測定法は、縄文・弥生時代の考古資料に利用されることが多く、歴史時代の資料を対象とした研究例は国内外ともに少ない。また、その多くが系統的なものではなく、数点の測定による試みや真贋判定であるといっていよいであろう。こうした状況の中で、和紙については、書跡史的に年代の判明している古文書・古経典の測定例が蓄積され、古文書の書写年代を判定する上で、加速器質量分析法(AMS)による ^{14}C 年代測定は有効な手法であることが実証されてきた。また、古筆切とよばれる古写本の断簡には、極札と

いうその筆名を記した鑑定書が付されていることが多い。しかし、極札にある筆者の時代と書跡史的年代とが矛盾する古筆切も多く存在する。こうした古筆切について行った ^{14}C 年代測定では、極札ではなく書跡史的年代を支持する値が得られている。すなわち、書写年代と明らかに異なる時代の人物が極札に記されている古筆切の存在が、自然科学的にも確認されている。本研究は、これら二つの基礎研究の上に立ち、極札によらず、書跡史的判断とAMS ^{14}C 年代測定法の適用により、古筆切の書写年代を求め、潜在的なものである古筆切の史料的価値を明ら

かにし、その上で、平安・鎌倉期の写本の一部である古筆切から、新たな歴史学的知見を得ようとするものである。

2. 研究の目的

古筆切とは、平安時代や鎌倉時代の古写本が、一頁一頁、ときには数行ずつに裁断されてできた断簡である。これは、安土・桃山期以降の茶道の流行に伴い、茶室で鑑賞する掛軸の題材として古写本の断簡が利用されたことが主な原因と考えられている。さらに、江戸時代に入ると、古筆切の収集も流行するようになり、集めた古筆切を張り込んだアルバム(古筆手鑑)も登場する。後にはこれが公家や武家の嫁入り道具の一つとされ、古写本の解体は一層加速されるに至る。それゆえ、平安・鎌倉期の古写本が完本として現在まで残っていることは極めて稀である。しかし逆に、古筆切という断簡としては、かなりの量の平安・鎌倉期古写本が伝来していることになる。したがって、古筆切の史的価値は極めて高いはずである。しかし、掛軸や収集の対象としての需要に応えるべく後世に作製された偽物や、その流麗な筆跡を臨書した写しも含まれている。

そのため、書写年代や筆者が不明のままでは、古筆切の高い史的価値も潜在的なものに過ぎないのである。古筆切はわずかに数行の資料であるため、一般の古文書や古記録とは異なり、書風・字形・筆勢などの書跡史的な視点から、書写年代や筆者について結論を下すことが困難な場合がある。また、古筆切には、その筆者の名を記した極札とよばれる鑑定書が添付されていることがあるが、これだけで年代・筆者の判定をすることもできない。すなわち、極札は主に近世の鑑定家によって付されたものであるが、現在の書跡史学の視点から推定される年代とは明らかに異なる時代の人物の名が記されているものが多く見出されるのである。

一方で、和紙の年代を判定する自然科学的手法としてAMSによる ^{14}C 年代測定法がある。これまで、年代の判明している古文書・古経典の測定例の蓄積から、 ^{14}C 年代測定の結果が書写年代とよく一致することが示されている。また、極札と書跡史的判断の矛盾する古筆切についての ^{14}C 年代測定によって、書写年代と異なる時代の人物の極札を持つ古筆切の存在が、自然科学の面からも確認されている。

そこで本研究では、まず ^{14}C 年代測定が古文書等の書写年代を判定する有効な手法となることを実証するために、書写年代の判明している古文書・古筆切の ^{14}C 年代についての実例をさらに蓄積する。

その上で、村雲切・細川切・金剛院切など古来より有名な代表的な古筆切の ^{14}C 年代決

定を行い、その書写年代を確定するとともに、後世の偽物・臨書である疑いのある古筆切についても ^{14}C 年代決定を行うことで、古筆切の史的価値を明らかにする。

また、書写年代を求め、史的価値の位置づけを行った古筆切によって、平安・鎌倉期の現存写本が少ないが故に困難であった問題の解明を行う。

3. 研究の方法

古文書・古筆切の ^{14}C 年代測定を、以下のような手順で行った。

まず、古文書・古筆切の余白部分から数～数十 mg の紙片を試料として採集した。古筆切の多くには、後世に補強のため貼り付けられた1～3層(多い場合は、10層弱)の裏打ち紙がある。まずは、試料を蒸留水に浸し、文字の書かれていた本紙をこれら裏打ち紙から剥離した。その後オイルフリー凍結乾燥法により試料を乾燥させ、本紙を裏打ち紙から分離した。

次にこの本紙から不純物を除去するため、試料に対し以下の調製を施した。まずは蒸留水中にて超音波洗浄を行い、料紙表面に付着している汚染物を除去した。その後、1.2N HCl(60°C, 2h×5回), 1.2N NaOH(60°C, 2h×5回), 1.2N HCl(60°C, 1h×3回)での交互洗浄に供することで、炭酸塩・タンパク質などの不純物を除去した。蒸留水中での洗浄後、試料を真空デシケーター中にて乾燥させた。

化学洗浄後の試料を2～4mg分取し、CuO(ca. 700mg)とともに、バイコール管に封入した。これを加熱(850°C, 3h)することで、試料を酸化させた。生成した CO_2 を真空ライン中にて、エタノール(ca. -110°C), n-ペンタン(-129.7°C), 液体窒素(-195.8°C)の冷媒を用いて精製した。この CO_2 を H_2 およびcat-Feとともにバイコール管に封入し、加熱(650°C, 6h)することで、グラファイトを調製した。

このグラファイトをターゲットとして加速器質量分析計による ^{14}C 年代測定を行った。得られた ^{14}C 年代は較正曲線 IntCal09等により暦年代に換算した。

4. 研究成果

(1) 書写年代既知の古文書・古筆切

一般に、木製資料の ^{14}C 年代測定において得られる較正年代は、その資料が何らかの役割をもって歴史の中に登場した年代(歴史学的年代)よりも古い値を示す。いわゆる old wood effect である。歴史資料に ^{14}C 年代測定法を適用する際には、測定により得られる自然科学的年代と探求すべき歴史学的年代との関係を明らかにしておく必要がある。

そこで本研究では、書写年代が1年～数年単位で判明している古文書・古筆切・古写経

等について¹⁴C年代測定を行った。その結果、これら和紙資料の¹⁴C年代は、その書写年代と一致する値が得られた。和紙は、楮・雁皮・三桮などの低灌木から生産される一種の木製資料である。しかし、¹⁴C年代測定の結果はその old wood effect による年代のずれが極めて小さいことを示している。その第一の理由として、製紙原料には生えて数年程度の枝が選択的に利用されるため、一般の木製資料で問題となる樹齢による年代のずれが小さいことが挙げられる。また、長期間保存した和紙は硬くなり書写に適さなくなる「風邪を引く」とよばれる現象を起こすため、原則的には製紙から料紙として利用されるまでの期間も短かったと考えられる。和紙は木製資料の一種であるが、樹齢や乾燥期間などに由来する old wood effect が小さく、¹⁴C年代測定に適した資料であるということが出来る。この書写年代既知資料についての研究結果から、AMS¹⁴C年代測定によって古筆切の書写年代の判定が可能であること、さらに筆者の推定に有効な情報が与えられることが実証された。

(2) 古筆切の書風と¹⁴C年代

村雲切・細川切・金剛院切など由来より有名な代表的な古筆切は、その書風から平安後期・鎌倉前期・江戸期といった形で年代が与えられている。その¹⁴C年代測定の結果は、おおむね書風と矛盾しない値が得られた。しかしながら、平安末～鎌倉初期の書風をもつ古筆切の中から、鎌倉後期から南北朝期までの¹⁴C年代をもつ古筆切が見出された。これは、平安末～鎌倉初期とされる書風が、その時期固有のものではなく、南北朝期に至る後世まで使用されていた可能性を示しており、今後、書跡史学・文献史的な視点を含めた検討を要する課題である。

(3) 古筆切の極札と¹⁴C年代

古筆切の中には、中臣鎌足・小野道風・藤原定家・俊寛・西行ら歴史上の有名人や歌道上神格化された人物の名が記された極札をもつものが多くある。しかしながら、こうした古筆切について行った¹⁴C年代測定の結果から、そのほとんどが、真筆ではなく数世紀後の別人の書であることが示された。ただし、伝藤原定家筆の大式高遠集切・明月記切、伝西行筆五首切・未詳歌集切など、数点の古筆切については、これらが定家・西行らの活躍した時期のものであるという結果が得られた。

また、伝飛鳥井雅経筆・伝宗尊親王筆とされる古筆切については、後世のものではなく、彼らの時代よりも以前に書かれたものであることが示された。

(4) 古筆切の史的価値

古筆切は、稀少な鎌倉以前の古写本の断簡であるが、後世の写し・偽物が混在しているという問題のある史料である。故に、その書写年代が判明すれば、歴史史料としての価値も確定するといつてよい。特に、現存する古写本が稀少である鎌倉時代以前のものであれば、古筆切は断簡といえども非常に高い史的価値を有する。本研究では、年代測定により書写年代を判定した古筆切を史料として、以下のような書跡史学・国語学・古典文学等に関する研究を行った。

①草仮名は、漢字から平仮名に変化する過程にある文字であるが、年代の判明している草仮名の遺品は極めて少なく、その変遷に関する情報も少ない。本研究では、「ふゆこもりさえしこほりをあか(ね)さすあをみなつきのもとのみるかな」という現在は知られていない和歌の書かれた古筆切について¹⁴C年代測定を行った。この古筆切には、「ゆ・も・さ・を」など草仮名風の字体が含まれており、年代測定の結果、10世紀末から11世紀初頭のものであることが判明した。これは源氏物語が書かれた時期に相当し、当時の仮名の実態を知る上での貴重な史料が発見されたことになる。

②古筆切に用いられている料紙には、装飾の施されたものがある。飛雲紙は、空に雲が浮かぶように藍と紫で染めた繊維が漉き込まれた料紙である。従来、飛雲紙は11世紀半ばから12世紀初頭という短い期間にだけ特異的に用いられた料紙であるとされていた。しかし、飛雲紙に書かれた古筆切・同筆の古筆切の¹⁴C年代測定から、飛雲紙の出現が10世紀ないし遅くとも11世紀初頭にまでさかのぼること、時代が下るとともに漉き込まれる飛雲が小型化する傾向があることが示された。唐紙も装飾料紙の一つであり、胡粉という白色顔料を紙面に引き、その上に雲母と膠を混ぜたものを用いて唐草文や亀甲繫文などを版木で刷り出したものである。11世紀頃に中国からもたらされたものと考えられているが、¹⁴C年代測定では、11～12世紀のもの、16世紀～17世紀初頭のもものが確認された。

③頭広切・御家切・了佐切という総称でよばれている古筆切は、異なる書風を呈しているが、いずれも藤原俊成(1114-1204)の筆とされている。俊成の筆跡は、枯れ枝を折ったような鋭い筆線に特徴があるが、この3つの古筆切のうち、その特徴を備えたものは了佐切だけである。了佐切に比べると御家切はやや丸みを帯びた筆線で書かれており、頭広切では、さらに丸みが強い。そのため、従来は、俊成壮年期の筆が頭広切、ついで御家切、晩年期のものが了佐切とされており、書風が年齢とともに変化したものと考えられていた。

しかし、顕広切2点・御家切1点・了佐切1点について行った¹⁴C年代測定では、俊成が歌人・書家として活躍していた時期に合致するものは、了佐切と御家切であり、顕広切は2点とも14世紀から15世紀初頭のものという結果が得られた。すなわち、顕広切は、俊成壮年期の筆跡ではなく、後世の別人の手になる書であることが示された。顕広切のほかにも、水無瀬切・鶴切・塙正切など、平安末から鎌倉初期のものとされている古筆切の中に、鎌倉後期から南北朝期のものが含まれていることが¹⁴C年代測定の結果から示された。

④伝中臣鎌足筆妙法蓮華経巻第五断簡には、古筆見(古筆切の鑑定家)である二代目畠山牛庵(1625-1693)の極札が付されており「大職冠鎌足公」とある。極札に従えば中臣鎌足(614-669)によって書かれた7世紀中頃の書となるのだが、書風からは12世紀～15世紀頃のものとして判断できる。中臣鎌足筆とされる古筆切は、『鳳凰臺』という古筆手鑑の中に仏書切という名で捺されており、他にも『藻塩草』の多武峯切、『あけぼの』の経切、『手鑑』の法華経切、『世々の友』の法華経切など、多くが伝存している。しかし、いずれの古筆切も平安～鎌倉期の書写もしくは高麗経・李氏朝鮮経とされている。¹⁴C年代測定の結果は、14世紀の書というものであった。これは、鎌足の筆跡を真似た偽物というのではなく、16世紀末以降の古筆鑑定の際に、鎌倉後期から南北朝期の写経が高麗経に鎌足の名を記した極札が付されたものであると考えられる。鎌足は周知の通り、中大兄皇子(626-671、後の天智天皇)とともに蘇我大臣家討伐に始まる一連の政治改革「大化改新」を行った人物である。中臣鎌足以外にも歴史上の有名人や歌道上神格化された人物を伝承筆者とする古筆切が後世のものであることが、¹⁴C年代測定で示された。

⑤古典文学の作品を国語学・文学・歴史学等の研究対象とする際には、その作品の正確な本文が必要となる。版本という印刷物が登場する以前、文学作品は書写されて伝えられることが一般的であった。しかし、書写には衍字・誤字・脱字、文章の錯簡などがともなう。そのため、書写が繰り返されるに従い、本文は原典のそれから遠ざかってゆくことになる。したがって、原典もしくは原典に近い古い時代の古写本が求められるのであるが、鎌倉時代以前の古写本が現存することは極めて稀である。しかしながら、古筆切という断簡の形では、原典に近い本文が残されている可能性がある。平安時代の僧円珍の筆と伝えられる三井寺切は、草書で書かれた仏書の断簡である。この古筆切の紙背には楷書で書かれた『文選』が残されている。『文選』は周から梁に到る詩賦を編纂した書である。

日本でも平安貴族の必読書とされていたにもかかわらず、現存する『文選』写本は極めて少ない。正倉院文書に一部を書写したものがある他は、平安・鎌倉期の残欠本が数点知られるだけである。この古筆切の紙面と書跡から『文選』側が先に書かれた表であり、後に再利用として仏書が裏面に書写されたと判断できる。また、『文選』に認められる特異な用筆と字体は世説新書巻六・王勃集といった唐抄本に共通するものである。¹⁴C年代測定を行った結果は、7世紀後半～8世紀を示した。上述の書跡史的な知見を加えて判断すると、本史料に残された『文選』は唐代、もしくは本邦書写ならば奈良時代に書かれたものであると結論付けられる。すなわち、本古筆切は日本に現存する『文選』としては最古級の写本の断簡であり、より原典に近いその本文は高い史料価値を有するということができる。李善注の『文選』としては、宋本を底本とする清代胡克家の重刻本が広く知られているが、そこに見られない文言を本古筆切に見出すことができる。本古筆切の四行目からある「漢書曰上左右大臣皆山東人多勸上都雒陽張良曰雒陽非用武之國上即曰西都關中」と六行目からの「社預左氏傳注曰寔實也」の部分(計45文字)が、後の胡克家本では欠落しているのである。古筆切の中には、元は同じ本を構成していた別の頁や部分が見出されることがある。これらをツレという。白鶴美術館蔵手鑑には、本『文選』のツレと思われるものが伝傳教大師筆儒書切の名で捺されている。これを胡克家本と比較すると、逆に胡克家本に衍字が加えられていることがわかる。三井寺切としてもツレが存在し、MOA美術館蔵「翰墨城」・出光美術館蔵「見努世友」・徳川黎明会蔵「蓬左」・三井文庫蔵「高松帖」・飯島春敬氏蔵「名寶古筆大手鑑」などの古筆手鑑に捺されているものがある。手鑑には伝円珍筆の仏書側を表に貼られていることが多いが背面の『文選』が透けて見えるものや、白鶴美術館蔵手鑑のように『文選』側が表になっているもの、台紙や裏打ちのないいわゆる「まくり」の状態で伝世しているもの、これらを集積することができれば、散逸してしまった唐代ないし奈良時代の古写本を部分的ではあるが復元できる可能性がある。

⑥「隆能源氏」とも称される国宝『源氏物語絵巻』は、紫式部が著した『源氏物語』を絵画化した最古の遺品である。また、現在知られている『源氏物語』の本文は鎌倉期に成立した二系統の写本が元になっているが、『源氏物語絵巻』にある文章(詞書)はこの両系統よりも古く、紫式部の原本に近い本文形態をとどめている。『源氏物語絵巻』の成立年代に関しては諸説あるが、その詞書から年代を求めることができる。詞書は書風の違い

から五種類に分類されている。そのうち橋姫巻などに見られる第四類とよばれる筆跡は、飛鳥井雅経(1170-1221)のものと伝えられている。これに従うならば、『源氏物語絵巻』は鎌倉初期の成立ということになる。今城切や長谷切など、『源氏物語絵巻』詞書第四類と同一の筆跡をもつ古筆切の存在が知られており、その伝承筆者も飛鳥井雅経である。しかし近年では、これらの筆跡は雅経ではなく、藤原教長(1109-1180?)のものであることが定説となりつつある。そこで、雅経筆とされる今城切と金銀切箔和漢朗詠集切の¹⁴C年代測定を行った。今城切・金銀切箔和漢朗詠集切の較正年代は、ともに11世紀中頃から12世紀後半の値を示した。すなわち、今城切・金銀切箔和漢朗詠集切の筆跡は、伝承筆者の飛鳥井雅経ではなく、近年提唱されているように藤原教長のものということになる。したがって、詞書第四類の筆跡とこれら古筆切の同筆性が確実ならば、『源氏物語絵巻』が成立した年代は12世紀中頃から後半の藤原教長の時期に求められると結論付けることができる。

⑦『深窓秘抄』は平安中期の和歌集であり、その撰者は藤原公任(966-1041)であると考えられている。しかし、江戸時代以前に書写された『深窓秘抄』の伝本は一冊しか現存しておらず、現在国宝に指定されている。この国宝『深窓秘抄』は、その唯一性に加えて、飛雲紙に書かれているところにも特徴がある。飛雲紙は平安時代特有の料紙であり、書風も平安時代のものであるが、『深窓秘抄』の伝承筆者には、第六代鎌倉将軍宗尊親王(1242-1274)があてられている。この『深窓秘抄』と同筆とされる古筆切が存在する。やはり宗尊親王の極札を有する伝宗尊親王筆十卷本歌合切と伝宗尊親王筆如意宝集切である。本研究では、この二つの古筆切について¹⁴C年代測定を行った。その結果は、どちらも、11世紀半ばから12世紀半ばの値であり、鎌倉将軍の筆ではなく、平安時代の書であることが示された。それゆえ、この結果から同筆である『深窓秘抄』の書写年代も鎌倉時代ではなく、11世紀半ばから遅くとも12世紀半ばの平安時代であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ①Oda, H., Yasu, H., Ikeda, K., Sakamoto, M. and Yoshizawa, Y. (2011) Radiocarbon dating of ancient Japanese calligraphy sheets and the discovery of 45 letters of a lost manuscript. *Radiochimica Acta*, (印刷中). (査読有)

②池田和臣, 小田寛貴 (2011) 古筆切の年代測定Ⅲ — 加速器質量分析法による炭素14年代測定 — . 中央大学文学部紀要, 言語・文学・文化第107号(通巻234号), 35-72. (査読無)

③小田寛貴, 増田 孝, 池田和臣, 安 裕明, 吉澤康和, 中村俊夫 (2011) 年代既知の古文書・古経典・古記録についての¹⁴C年代測定. 第12回AMSシンポジウム報告集, 81-84. (査読無)

④Oda, H. and Ikeda, K. (2010) Radiocarbon dating of *kohitsugire* calligraphies attributed to Asukai Masatsune and the periods of origin of *Genji Monogatari Emaki* and *Ban-dainagon Ekotoba*. *Radiocarbon* 52(2-3), 520-525. (査読有)

⑤小田寛貴, 池田和臣 (2010) 伝飛鳥井雅経筆古筆切の放射性炭素年代と源氏物語絵巻の制作年代. 第11回AMSシンポジウム報告集, 58. (査読無)

⑥Oda, H. and Ikeda, K. (2010) Radiocarbon dating of *kohitsugire* calligraphies attributed to *Fujiwara Shunzei: Akihiro-gire, Oie-gire, and Ryosa-gire*. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B*, 268, 1041-1044. (査読有)

⑦池田和臣, 小田寛貴 (2010) 続 古筆切の年代測定 — 加速器質量分析法による炭素14年代測定 — . 中央大学文学部紀要, 言語・文学・文化第105号(通巻229号), 1-46. (査読無)

⑧池田和臣, 小田寛貴 (2009) 古筆切の年代測定 — 加速器質量分析法による炭素14年代測定 — . 中央大学文学部紀要, 言語・文学・文化第103号(通巻224号), 1-41. (査読無)

[学会発表] (計15件)

①Oda, H., Ikeda, K. and Nakamura, T. : Radiocarbon dating of ancient calligraphy attributed to Fujiwara Teika: The genuine handwritings, copies, and counterfeits of the famous calligraphist. 2011. 3. 24, 12th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry, Wellington (New Zealand).

②小田寛貴, 池田和臣, 増田 孝, 安 裕明, 吉澤康和, 中村俊夫: 極札をもつ古筆切の¹⁴C年代測定と歴史学・書跡史学・古典文学上の意義について. 2011. 01. 29, 第13回AMSシンポジウム, ホテルキャッスル (山形県山形市).

③小田寛貴, 池田和臣, 増田 孝, 安 裕明, 吉澤康和, 中村俊夫: 古文書・古筆切の¹⁴C年代測定 — 書風と書写年代と極札 — .

2011.01.13, 第23回(2010年度)名古屋大学年代測定総合研究センターシンポジウム, 名古屋大学野依記念学術交流館(名古屋市).

- ④ Oda, H., Ikeda, K., Masuda, T., Yasu, H. and Yoshizawa, Y.: Radiocarbon dating of ancient Japanese paper: Comparison with ancient documents of known age and application to kohitsugire calligraphy. 2010.12.18, 2010 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (PACIFICHEM 2010), Honolulu, Hawaii, (USA).
- ⑤ 小田寛貴, 増田 孝, 池田和臣, 中村俊夫: 和紙試料の¹⁴C年代がもつ old wood effect について—書写年代既知の古文書の¹⁴C年代測定から—. 2010.11.28, 日本植生史学会第25回大会, 名古屋大学野依記念学術交流館(名古屋市).
- ⑥ 小田寛貴, 池田和臣, 安 裕明: 古筆切の¹⁴C年代と書写年代・書風・伝承筆者の関係. 2010.09.29, 第54回放射化学討論会, 大阪大学吹田キャンパス銀杏会館(大阪府吹田市).
- ⑦ 小田寛貴, 池田和臣, 安 裕明: 炭素14年代測定法を用いた古筆切の伝承筆者と書写年代との相違に関する研究—伝中臣鎌足筆, 伝宗尊親王筆古筆切等を例にして—. 2010.06.27, 日本文化財科学会第27回大会, 関西大学100周年記念館(大阪府吹田市).
- ⑧ 小田寛貴, 中村俊夫, 増田 孝, 池田和臣, 安 裕明, 吉澤康和: 年代既知の古文書・古経典・古記録についての¹⁴C年代測定. 2010.05.24, 第12回AMSシンポジウム, 桐生市市民文化会館(群馬県桐生市).
- ⑨ Oda, H., Yasu, H. and Sakamoto, M.: Radiocarbon age of Miidera-gire attributed to Enchin and the historical age in which an ancient manuscript of Monzen was written. 2009.12.01, 4th Asia-Pacific Symposium on Radiochemistry '09, Napa Valley, California, (USA).
- ⑩ 小田寛貴, 安 裕明, 坂本 稔: 伝円珍筆三井寺切の放射性炭素年代と紙背『文選』断簡の書写年代. 2009.07.11, 日本文化財科

学会第26回大会, 名古屋大学豊田講堂(名古屋).

- ⑪ Oda, H. and Ikeda, K.: On the execution ages of Genji narrative scroll and Ban Dainagon narrative scroll by radiocarbon dating of kohitsugire calligraphies attributed to Asukai Masatsune. 2009.06.02, 20th International Radiocarbon Conference, Big Island, Hawaii, (USA).
- ⑫ 小田寛貴, 池田和臣: 伝飛鳥井雅経筆古筆切の放射性炭素年代と源氏物語絵巻の制作年代. 2009.01.14, 第11回AMSシンポジウム, 名古屋大学野依記念学術交流館(名古屋).
- ⑬ 小田寛貴, 池田和臣: 古筆切の伝承筆者と書跡史的年代・¹⁴C年代との相違に関する研究—古筆切の¹⁴Cから見た源氏物語絵巻の成立年代—. 2008.09.27, 第52回放射化学討論会, 広島大学霞キャンパス内広仁会館(広島).
- ⑭ Oda, H. and Ikeda, K.: Radiocarbon dating of kohitsugire calligraphies attributed to Fujiwara Shunzei: Akihiro-gire, Oie-gire and Ryosa-gire. 2008.09.18, 11th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry, Rome, (Italy).
- ⑮ 小田寛貴, 池田和臣: 古筆切の伝承筆者と書跡史的年代・¹⁴C年代との相違に関する研究—伝藤原俊成筆頭広切・御家切・了佐切を中心に—. 2008.06.15, 日本文化財科学会第25回大会, 鹿児島国際大学(鹿児島).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小田 寛貴 (ODA HIROTAKA)
名古屋大学・年代測定総合研究センター・助教
研究者番号: 30293690

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし